

立寄り先のご案内とコースマップ

生駒ケーブル

1918年（大正7年）8月29日に生駒鋼索鉄道（鳥居前駅～宝山寺駅／現・近鉄生駒鋼索線）が創業、山中にある寶山寺への参詣の足として敷設された。これが日本初のケーブルカーであり、開業日が「ケーブルの日」となっている。

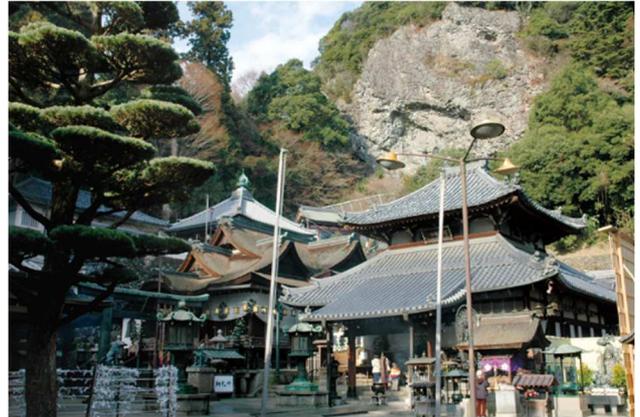
1928年に車体更新した木造車両のコ1形が、日本にある現役最古のケーブル車両として有名だったが、2000年から更新され、現在の動物キャラの車両に変わった。引退した車両は、生駒山麓公園に展示されているそうだ。

宝山線と山上線に分かれて運行する。宝山寺線は住民の足として、6時半から23時まで概ね20分ごと（通勤時15分）に、山上線は通常40分毎（時期により臨時便あり）に運行する。



生駒山寶山寺（ほうざんじ）

寶山寺は真言律宗の寺院。山号は生駒山。本尊は不動明王。鎮守神として大聖歡喜天（聖天）を聖天堂（天堂）に祀っており、生駒聖天（いこましょうてん）とも呼ばれる。PWで訪れた平城山（ならやま）の般若寺（はんにゃでら）や当尾（とうの）の岩船寺・浄瑠璃寺もこの宗派に属する。この宗派の総本山が奈良市の西大寺であり、ここ寶山寺が大本山になる。



奈良時代、役行者が開き、大聖無動寺（だいしょうむどうじ）と呼んで、空海（弘法大師）も修行したと伝わるが、事実上は、江戸時代の延宝6年（1678年）に湛海律師が再興し開山した。その後、大聖歡喜天を鎮守として祀り、貞享5年（1688年）に新本堂と伽藍の整備を行って、寺名を寶山寺と改めている。

歡喜天（聖天）はヒンドゥー教の像頭の神に由来しており、学問の神であり、富を司る神でもある。このことが、大阪商人と結び付き、ここ関西では商売繁盛の神として崇められ、毎月1日と16日に「歡喜天御縁日」として人気がある。歡喜天は本堂の横、聖天堂に安置されている。

寶山寺獅子堂は明治に建てられた和洋折衷の重要文化財となっている客殿（迎賓館）。5月3日～5日、9月23日、10月11日～13日の合計7日間、今年是一般公開するようで、興味がある方は覗かれては如何でしょうか。



暗闇峠（くらがりとうげ）

奈良県生駒市西畑町と大阪府東大阪市東豊浦町結ぶ国道 308 号。標高は 455m。名前の由来は諸説あるが、昼間も鬱蒼と暗かったとの説や、上方落語の「伊勢参宮神乃賑（かみのにぎわい）」で、「あまりに陰しいので馬の鞍がひっくり返りそうになったことから、鞍返りと言うそうだ」と語っている。

奈良時代、難波と平城京を結ぶ最短路としてつくり、『五畿内志』に記したとある。そして、防人や唐・朝鮮の外国使節もこの道を通って平城京と行き来したとある。江戸時代に入ると、大名の参勤路に使われ、大和郡山藩の本陣を暗峠の村に置いた。江戸時代後期になると、庶民が伊勢参宮道として使い、賑わっていた。1694 年 10 月 27 日（元禄 7 年 9 月 9 日）、松尾芭蕉が奈良から大坂へ向かう道中にこの峠を使った。このときに「菊の香に くらがり越ゆる 節句かな」という重陽の節句にちなんだ句を詠んでいる。

コースの途中に暗峠越え最大の勾配となる場所がある。勾配は 31%（1 m で 31 cm の上り又は下りとなる傾き）。国道では最大の勾配とされる。道路構造令では最大 12% と定めているらしいが、大幅に上回っている。きっと例外があるのだろう。日本では国道ではないが、東京都の東大和市に勾配 37% の車道があり、これが最大だとされ、自動車道では二番目に大きな勾配だと言う。因みに鉄道の最大勾配は、信越本線の碓氷峠越え、横川―軽井沢間の勾配 66.7%（パーミルのことでパーセントに換算すれば 6.67%）が最大。開業当初は歯車と歯形のラックレールを使ったアプト式の列車だった。何れにせよ、100 m 進めば、30 数 m の上りとなり、12～14 階建てのマンションの階段を上ることになる。この坂道を使って、YAMAHA がアシスト自転車の CM を作っていたらいい。この苛酷な勾配を体感するのも、楽しみの一つではないでしょうか。



枚岡神社（ひらおかじんじゃ）

元々、神津嶽山上に祀られていたが、孝徳天皇の代、650年（白雉[ハクジ]元年）、山麓の現地に移った。神768年（護景雲[ジゴケウツ]2年）に、天兒屋根命[アメノヤネノミコ]・比売御神[ヒメノミカミ]の二神が春日山に影向し、現在の春日大社に祀られた。そのため当社は「元春日[モトカガ]」とよばれる様になった。その後、宝亀(ほうき)9年（778年）春日神社より、武甕槌命[タケミガツノ]・斎主命[イハヒノミコ]の二神を春日神社より迎え四殿の社殿とした。このような神々の系譜から言って、枚岡神社は日本最古の神社とされている。

856年（貞観元年）天兒屋根命が神階の正一位を授かり、延喜式神名帳に「名神大社」に列せられた。1091年（寛治5年）、堀河天皇が参拝されたこともあり、以降、朝廷から特別な尊崇を受けていた。明治になり、旧官幣大社に列せられている（参考：神社が日本全国おおよそ8万8千社あり、その中で旧官幣大社は現在、65社が列せられている。兵庫県では廣田神社・淡路の伊弉諾神社の2社、関西には約半数の34社が鎮座する）。



姥ヶ池（うばがいけ）伝説

「姥ヶ池」と呼ばれるこの池は、約六百年前、「悲しい老婆の身投げ伝説」があった。その伝説とは、枚岡神社（ひらおかじんじや）の御神燈の油が毎夜なくなり、火が次々に消えたと言う。妖怪変化の仕業とされたが、その実、生活に困っていた老婆が油を盗んでいたと判る。気の毒な老婆は釈放するが、噂は広まり、老婆は池に身を投げてしまった。その後、雨の晩になると池の付近に青白い炎が現れ、村人を悩ませたと言う。この物語は、井原西鶴の短編話や、多くの俳諧・戯曲に「姥が池の姥が火」として登場。また、「和漢三才図絵[ワカンサンサイ]」「河内名所鑑[カチメイシヨウカミ]」にも掲載している。



《参考》

姥ヶ池は日本全国にある。東京台東区花川戸公園・千葉県佐倉城・静岡県藤枝市・東大阪・香川県高松市などに伝説が残っている。この中で、取り分け、花川戸公園の浅茅ヶ原の鬼婆伝説がつとに有名な様だ。

花川戸公園は浅草寺の二天門から東へまっすぐ。花川戸公園内に石碑と祠、そしてわずかばかりの人工池がある。ここに明治24年(1891年)に埋め立てられるまで、姥ヶ池というかなり大きな池があった。池は隅田川まで通じていたと言われていたので、相当な面積であったと推測される。

浅草寺が創建された頃、この周辺一帯は浅茅が原と呼ばれ、奥州へ向かう街道ではあるものの、見渡すばかりの荒地であったという。その荒野にあばら屋が一軒、老婆とその娘が暮らしていた。この辺りで日が暮れると、旅人はこの一軒家に宿を借りるしかなく、二人もそれを承知して旅人を泊めていた。しかし親切な老婆の正体は、実は悪逆非道な鬼婆だった。旅人が眠りに就くと、吊しておいた大石を落として頭を叩き割り、金品を奪って、遺骸は近くの池に捨てたと言う。



そしてその所業を浅ましく思う娘は何度も諫めたが、老婆は聞く耳を持たない。あと一人で千人の命を奪うところまできたある夕刻、一人の稚児が宿を請うた。老婆はいつものように床へ案内すると、稚児が寝静まるのを待つ。頃合いを見計らって、いつものように大石を頭めがけて落とす。そして殺した稚児を調べると、女の身体にすり替わり、老婆の娘だと解った。冷酷無比の鬼婆も事の次第に茫然自失。遂に自らの所業を悔い改めた。稚児が姿を見せると、その姿は浅草寺の観音菩薩だった。その後の老婆は、娘に手に掛けた報いと己の所業を悔いて池に身を投げしたとも、観音菩薩の法力によって龍となり娘と共に池に沈んだとも謂われる。老婆の行方は定かでないが、以上が、「浅茅が原の鬼婆」に纏わる伝説である。

NHK 朝ドラ「舞い上がれ」

2022年10月スタートしたNHK「舞い上がれ」は東大阪を舞台にした朝のドラマ。主人公岩倉舞（福原遥）が学生時代（大阪公立大）、人力飛行機の部活に所属。鳥人間コンテストに挑戦する。それが講じてパイロット養成学校を幾多の壁を乗り越え卒業する。しかし、パイロットの道に行かず、父親の鉄工会社を継ぐ。父親は飛行機部品を手掛けるも、早世してしまう。母親（永作博美）と舞が力を合わせ、苦境の中、町工場を盛り立てて行く。

そんな展開だったかと思う。そして、長崎の五島列島に住む祖母（高畑淳子）、東大阪の工場とお好み焼き屋夫婦（山口智充・くわばたえり）が物語に味わいを添えていた。枚岡駅の正面に食堂喫茶 PECOSLOPE（ペレストープ）がある。ここではないが、「舞い上がれ」の舞台となった喫茶店を彷彿とさせる店のようだ。近くに来ることがあれば寄りたいものだ。

